

青山フィルハーモニー管弦楽団

第42回外苑祭コンサートプログラムパンフレット別冊

発行日：2011年9月3日

編集・発行：青山フィルハーモニー管弦楽団

プログラム

曲目

岡村繁 / オーバード (世界初演)
ドヴォルザーク / スラヴ舞曲第8番
ヘルメスベルガー2世 / 悪魔の踊り
ブラームス / 大学祝典序曲

日時：2011年9月3日(土) 4日(日)

開場時間：12時30分(9月3日) 10時(9月4日)

プレコンサートトーク：12時45分(9月3日) 10時15分(9月4日)

開演時間：13時(9月3日) 10時30分(9月4日)

会場：東京都立青山高等学校体育館

指揮者

佐藤和佳菜(ブラームス) 長根尾貴仁(ヘルメスベルガー) 岡村繁(ドヴォルザーク、岡村)

コンサートのききどころ

今回の外苑祭コンサートは、青フィルの代表顧問でもある岡村繁先生の新作「オーバード」で幕を開けます。

うごめくような冒頭の弦楽器のトレモロから前衛的な和音へと至る序奏は、聞く人に深い印象を与えることでしょう。その後の、ときに牧歌的な、ときに洗練された映画音楽のような、そしてときに激しい旋律の連なりは、この作品が聴覚だけでなく視覚にも訴える曲であることを示しています。そして、金管楽器のファンファーレに続く終結部は、後期ロマン派の交響曲を連想させる重厚さが特徴的で、「夜明けの歌」を意味するオーバード(aubade)という名前にふさわしい、華麗な終わりを迎えます。

続いて演奏されるのは、ドヴォルザークの「スラヴ舞曲集」第1集より第8番です。

第1集と第2集の合計16曲からなるスラヴ舞曲集の中でも最も高い頻度で演奏され、スラヴ舞曲集の代名詞ともいえるのが第8番です。ドヴォルザークの故郷ボヘミア地方の伝統的な舞曲であるフリアント形式で書かれた第8番は、躍動的な冒頭部から出発して温和

な表情を見せる中間部を経て熱狂的な終わりを迎える、親しみやすい曲です。

3曲目は、ヘルメスベルガー2世の「悪魔の踊り」です。

冒頭から息をつく暇もないほどの疾走感を伴って演奏される音楽は、ヴァイオリンの名手としても知られたヘルメスベルガー2世の面目躍如というべき内容です。中間部に現れる軽妙な旋律は、19世紀末にヨーロッパの文化の中心地として大輪の花を咲かせたウィーンが生んだ大衆作曲家ヘルメスベルガー2世の手腕が冴える箇所です。そして、ウィンナーワルツの後に再び登場する快活な旋律が、華麗で力強く作品の幕を下ろします。

最後に取り上げるのは、外苑祭コンサートでは3年ぶりの登場となる、2011年度の青フィルの年間曲でもあるブラームスの大学祝典序曲です。

この作品は、1879年にドイツ帝国領ブレスラウにあったブレスラウ大学から名誉博士号を授与されたブラームスが、その返礼として1880年に作曲されました。

大学祝典序曲は1881年1月にブラームス自身の指揮によってブレスラウ大学で初演され、好評を博しました。ソナタ形式を採用し、厳密な構成によって作られたこの作品が人々に受け入れられた背景のひとつには、当時広く普及していた学生歌を巧みに取り入れたブラームスの機知を挙げるができるでしょう。

なお、ブラームスが大学祝典序曲で採用した学生歌は、次の4つです。

「僕らは立派な学び舎を建てた」(原題: Wir hatten gebauet ein stattliches Haus)

「祖国の父」(原題: Landesvater)

「あその山から来るのは何」(原題: Was kommt dort von der Höhe?)

「ガウデアムス」(原題: Gaudeamus igitur)

一連の交響曲や「ドイツ・レクイエム」といった作品によって、あるいは豊かに蓄えられた鬚が印象的な肖像画などによって、ブラームスは「難解」「晦渋」と思われがちな作曲家です。そのようなブラームスにとって、大学祝典序曲は「ブラームスらしくない」、珍しいとさえ思われる軽妙洒脱な音楽です。しかし、大家の余技という域にとどまらない緻密な構成と印象的な旋律の数々を見れば、大学祝典序曲がブラームスの代表的な管弦楽曲といえることが分かるのではないのでしょうか。

いずれも表情豊かな作品を取り上げる今回の外苑祭コンサートで、青フィルがどのような演奏を繰り広げるか、どうぞご期待下さい。

青フィルの情報は下記のサイトで随時ご案内しております。

<http://aoyamaphilharmonic.web.infoseek.co.jp/index.html>

世界初演作で振り返る青フィルの演奏会

(1) 新作初演に積極的な青フィル

今回の演奏会では、岡村繁先生の新作「オーバード」を取り上げます。

青フィルは、学生オーケストラとしては例外的に、日本人の作曲家への新作の委嘱と初演を積極的に行っています。

これまで、青フィルは 1987 年以來 26 回開催してきた定期演奏会で、次の 5 作品の世界初演を行ってきました。

- ・ 第 3 回定期演奏会 (1988 年): 齊藤英治 / 現代奏鳴曲 (指揮: 齊藤英治)
- ・ 第 4 回定期演奏会 (1988 年): 齊藤英治 / ピアノ協奏曲第 1 番
(指揮: 齊藤英治、ピアノ独奏: 宇多津愛子)
- ・ 第 16 回定期演奏会 (2001 年): 酒井治人 / オーケストラとサクスのための
(指揮: 村尾雄太、サキソフォン独奏: 佐藤和征)
- ・ 第 20 回定期演奏会 (2005 年): 森田一浩 / Ovation! (指揮: 佐藤和征)
- ・ 第 22 回定期演奏会 (2007 年): 福田洋介 / 風之舞 (管弦楽版、指揮: 福田洋介)

(2) 高校生が高校オーケストラで自分の作品を初演 現代奏鳴曲とピアノ協奏曲第 1 番

第 3 回、第 4 回で新作を発表した齊藤英治氏は当時青フィルの指揮者を務めており、「高校生が高校オーケストラで自分の作品を初演する」という、画期的で取り組みを実現しました。特に、第 4 回定期演奏会で発表されたピアノ協奏曲第 1 番は、独奏者も青フィル部員が務めるといふ、学生オーケストラの歴史の中でも大変珍しい作品となりました。

(3) 顧問と顧問の繋がり オーケストラとサクスのための

第 16 回定期演奏会で取り上げた酒井治人氏は 1991 年度から 1999 年度まで青フィルの代表顧問を務めました。「オーケストラとサクスのための」は、酒井氏の最後の教え子であった 2000 年度の 2 年生が作曲を依頼して誕生した作品です。この作品は、酒井氏の後任として青フィルの代表顧問に就任した佐藤和征氏 (在任期間: 2000 年-2005 度) がサキソフォン奏者であったことから、独奏サキソフォンと管弦楽のための協奏的作品となりました。

前衛的な構成を持つ第 1 部と一定の音型の反復であるオスティナートが印象深い第 2 部からなる「オーケストラとサクスのための」は、新旧の顧問を経験した人たちが中心となって、「前顧問の曲を現顧問が独奏者として演奏する」といふ「顧問同士の繋がり」を実現した、意義深い作品となりました。

(4) 「第 20 回定期演奏会記念」にとどまらない名曲 Ovation!

第 20 回定期演奏会を記念して青フィルが委嘱した作品が、森田一浩氏の Ovation! です。

森田氏は管弦楽から出発して吹奏楽の分野で数多くの作品を世に送り出している作曲家です。その森田氏と当時の代表顧問であった佐藤和征氏が旧知の仲であったことから、20

回目という節目の定期演奏会にふさわしい記念の曲の作曲が森田氏に依頼されることになりました。こうした背景によって誕生した Ovation! は、2005 年 4 月 29 日にティアラこうとうで行われた第 20 回定期演奏会の冒頭を華々しく飾ったのです。

明朗な構成と快活で洗練された旋律が印象的なシンフォニックマーチである Ovation! は、本来であれば定期演奏会が終われば、再びいつ演奏されるか分からない運命にありました。しかし、その華やかな音楽と、「青高生のために作られた」という点が決め手となり、2006 年 3 月に行われた卒業式の際に卒業生の入場曲として演奏されたのでした。以後、Ovation! は青山高校の入学式と卒業式の際に、新入生と卒業生の入場曲として演奏され、青山高校には欠かせない曲のひとつとして、在校生ばかりでなく保護者や教職員の皆さんにも幅広く親しまれる作品となっています。

(5) 特徴的な条件が生んだ作品 風之舞（管弦楽版）

元来吹奏楽曲として作曲された福田洋介氏の風之舞は、2003 年の第 14 回朝日作曲賞を受賞した作品で、青フィルの委嘱により管弦楽版の作曲が実現しました。

依頼者と作曲者が旧知の仲であったことが Ovation! を生み出したように、風之舞（管弦楽版）の場合も、当時の青フィルの部員が作曲者である福田氏の指導を受けていたことが、委嘱の契機となりました。

風之舞は 2004 年度の全日本吹奏楽コンクールの課題曲であったため、当時、吹奏楽に携わる人たちの間では大変に有名な作品でした。また、交響管弦楽の作品を吹奏楽用に編曲することは珍しくありませんでしたが、吹奏楽曲を管弦楽用に作り直すことは決して例が多いことではありません。しかも、福田氏にとっても風之舞の管弦楽版の作曲が自身にとって最初の管弦楽曲であるなど、様々な点で特徴的な条件の下で誕生したのが、風之舞（管弦楽版）でした。

青フィルの定期演奏会史上初めて客演指揮者として福田氏が登壇するなど、従来とは趣向を変えて行われた第 22 回定期演奏会でしたが、吹奏楽版とは違った躍動感と迫力を備えた待望の風之舞（管弦楽版）の演奏は、満員となった杉並公会堂の聴衆から、万雷の拍手をもって迎えられたのでした。

(6) 満を持しての登場 オーバード

これまで、第 39 回外苑祭コンサート（2008 年）のアンコールであるジョン・ウィリアムズの映画『スター・ウォーズ』より「メイン・テーマ」や、第 40 回外苑祭コンサート（2009 年）での久石譲の映画『もののけ姫』より「アシタカせつ記」など、岡村繁先生の作曲の手腕は、もっぱら既存の曲の編曲を通して発揮されてきました。そのため、今回のオーバードは、岡村先生の新作曲を青フィルが演奏する、最初の機会となります。

その意味で、「満を持して登場する」という表現がもっともふさわしいオーバードが、これからの青フィルにどのような足跡を残し、どのような物語を刻むのか、大いに期待されるといえるでしょう。